

ESSAY

東京散歩日記 第2回

よい子が住んでる
 よい町は……

by
 園田恵子
 Keiko Sonoda

私が港区高輪台から、ここ池袋へや
 つてきて二年めの夏を迎える。

JRと地下鉄丸ノ内線・池袋駅から
 徒歩10分、有楽町線・要町駅から徒歩
 3分、丸井もパルコも西武デパートも
 歩いて10分ほどのところにあつて、便
 利なことはこの上ない。

こんなに素敵な街なんだけど、実は
 ちよつと困っていることもある。
 お住いはどちら？ と聞かれて、
 「池袋の西口の近くです」
 と答えると、たいていの男性は卑猥
 な笑いを頬のあたりに浮かべて、
 「ああ、僕も夜に時どき行きますよ」
 といったり、
 「よくそんな所に女の子が住むねえ、
 環境悪いでしょう？」
 という。

これは、西口ロマンズ通りと呼ばれ
 るピンク街をすぐさま連想するための
 しい。
 挙句の果てには「もしや夜はバイト
 でも」と勘ぐられる始末である。
 あたまのてっぺんから足の先まで、
 ジロツとなめまわすように見るのはや

めてもらいたい。本当に困つたオジサ
 ンたちである。

しかし、私の所はビルの並ぶ表通り
 から少し奥まった閑静な住宅地。戦前
 からありそうな大きなお屋敷も（少し
 は）あるし、カラオケも呼び込みの声
 も聞こえてこない。隣家のウグイスの
 声が美しく、ホーホケキョと響くばか
 りである。

なんにも説明しないと、一階がピン
 クサロン、二階がのぞき部屋、三階が
 ファッション・ヘルスの雑居ビルの四
 階あたりに借り間して住んでるのだろ
 う、というのがせいぜいのイメージの
 ようだ。

ま、そんなに意地になって否定する
 ほど、そこは馴染みのうすいところで
 もない。なんといっても駅へ行くには
 そこを通るのが一番の近道である。お
 かげでそのテの店にはやたらと詳しく
 なつてしまった。まだ嫁入り前だとい
 うのに、いけないことだ。

池袋駅西口から、ネオン輝くロマン
 ス通りを入り、しなだれかかつてくる
 酔っぱらいをさげながら、すばやく駆
 けぬける。パンチパーマの男が、通る
 たびに、
 「オネーサン、働かない？」
 と声をかけてくれる角のピンクサロ
 ンを左に折れると、ちよつとひっそり
 とした通りに入る。この通りはファッ
 ション・ヘルスの店ばかりが軒を連ね
 ている。

全員21歳未満！ 6000円ポッキ
 リ などと書かれたカンバンをしげし
 げと見ながら行くと、つき当りに劇団

3000の渡辺えり子が昔住んでいたホ
 ロアパートがある。

そこからはさらにひっそりとした通
 りで、連れ込み旅館やラブホテル、
 街、もうつぶれてしまったまま放置さ
 れている。トルコ楽園のエンツツ（昔
 のソーランドにはエンツツがあった
 もんだけど、今はみんなガス風呂にな
 ってしまった）の向こうに見えるのが
 我が家である。

いつも深夜までにぎわっているし、
 ネオンで明るくてチカンもないし、
 本当に良いことづくめの道である。
 ところが、いつだったか。打ち合
 せて遅くなり、編集者のH氏に家の近
 くまで送っていただいたことがあった。
 私は何げなくいつも通る裏通りへと足
 を運んだ。

しまった、と思った時にはもうあと
 のまつり。隣を歩くH氏は、明らかに
 ホテルのネオンで高揚していた。これ
 ではまるで私がホテル街に連れ込んだ
 ようではないか。

H氏は立ち並ぶホテルのネオンをま
 ぶしそくに仰ぎ見、目をかがやかせて、
 ホテルの前を通る度に、うわあ／＼うわ
 あ／＼と歓声をあげて、喜んでる。
 「こ、こんどのはスゴイ！ 名前がス
 ゴイ！ ルイ十二世だ」

「ここは部屋が豪華そうなのに安い」
 「こゝんなに途中でホテルが多いと、
 もう、めつたに家になんか帰れないで
 しょう」
 といった。

H氏のあまりのはしやぎように、私
 はこわくなって走って帰ってきてしま

つた。

H氏の高揚ぶりを見て以来、男性に
 送っていただくときにはこの道を選
 ぶようになった。

近道するのをあきらめて、平安時代
 によくやつたという「方違え」をする
 ことにしたのだ。

駅前通りの大きな通りをまっすぐに
 進んで、川の上を公園にした細長い公
 園に沿って直角に曲がつて、迂回して
 いく。近道した時の2、3倍は時間か
 かるけれど、ここはまっとうな道で、
 うまくビルに隠されてホテル街もネオ
 ンも見えない。公園通りは赤レンガが
 敷きつめられて、両側には季節の花も
 咲き乱れるロマンティックな道。

この次からはこのロマンティックな
 道を通つて、この辺りで一番大きな洋
 館風のお屋敷の角で、
 「ではあたくし、ここで……」
 といおう。

ひそかに計略を練っていると某大手
 出版社の若くてハンサムな編集者N氏
 に送り届けられる機会がやつてきた。
 かねての計画通り、迂回コースをた
 どる。話には気がとられてるうちに、
 つい歩き慣れたホテル街の方へ足が向
 くのは冷や汗ものだったけど、

「あ、道まちがえちゃつた」
 と、何度か軌道修正してU字型に歩
 く。歩くうちに暗い公園にも日が慣れ
 てくる。

するとそこには、名高い日比谷公園
 にも負けないほどのハレンチなカップ
 ルがあふれていた。昼間しか予備調査
 しなかったのが悔やまれる。